

第2回 宮崎県立図書館ビジョン懇談会 発表・協議全記録

<座長 根岸裕孝委員>

それではそれぞれの委員の方々に発表していただきます。

<小橋智子委員>

テーマ：県内大学図書館が10年後の県立図書館に期待する事

県内大学図書館に「10年後の県立図書館に期待すること」として意見を求めたところ、8館中、私の所属する館を含め4館から次のような回答がありました。

(宮崎大学附属図書館)

大学図書館は、知の共有を図るため、教育研究成果の発信及びオープン化や、保存、出版された資料の整備及び利用の促進を行うとともに、必要な情報がよりの確かつ迅速に入手できる環境の実現を目指しています。また、知の創出の実現を図るため、新たにネットワーク上に知の創出・共有空間を整備し提供していくことも目指しています。

大学図書館として、知の共有や創出を図っていくには、新たな知識やスキル、そして人と知識や情報、人と人の結びつきを促進する人材を育成することが重要となってきます。

知の共有や創出の実現は、地域貢献や生涯学習の推進につながります。県内の大学図書館と公共図書館は連携を促進し、研修会や講習会を実施するとともに、県内図書館（大学図書館や公共図書館等）のコミュニティ形成や情報発信を行う場を構築することを要望します。

(宮崎公立大学附属図書館)

本学図書館は、本学学生への貸出冊数が減少傾向にあり、書架については狭隘化が進んでいる状況です。学生一人一人のニーズに沿って、多種多様な資料を提供したいと考えていますが、狭隘化を考慮し、本学の講義に直接関連している分野の資料を優先して選書を行っています。この現状を踏まえ、学生が求めている資料を可能な限り提供する必要がある中で、近隣である県立図書館との所蔵の有無を確認し、学生に案内する場合があります。

県立図書館には、このように、各館で多種多様な「資料の分担保存」を推進するとともに、所蔵資料を利用者に対してスムーズに案内できるよう、「定期的に情報提供・交換・交流の場を設ける」ことが求められます。また、県内図書館間で「問題の解決策等を共有」することにより、相互の図書館サービスの向上の一助になることを期待しています。

(南九州大学・南九州短期大学図書館)

本学は立地が県立図書館に近いこともあり、本学では補えないジャンルの本を学生がよく利用しています。県立図書館には大学図書館とは異なる分野での資料の充実（郷土資料や一般書）、宮崎市立図書館等の他の公共図書館との連携による幅広い資料の提供を期待しています。

(宮崎学園図書館 (宮崎国際大学・宮崎学園短期大学))

第1回の懇談会后、色々と県立図書館の事を振り返ってみました。

県立図書館が「Live! Library」を最初に掲げて、活動をされていた時に、様々なイベントを企画され、いくつか参加させていただきました。どれも実務に直結した内容で、大いに刺激を受け業務に反映させてきました。当時、県立図書館から“元気をいただき”「当館も、見直し・改善を・・・！」という前向きな気持ちになり、県立図書館の底力・影響力・可能性を強く感じました。小規模の当館にとっては大変心強い大きな存在です。

今後は、県内図書館の教育（人材育成）・研究（学術的研究・図書館学）機関的機能に重心を置いて施策（行動・人員計画）を立て、県内図書館全体の底上げ（市町村・学校・大学図書館の入館者増・貸出増、質・量の向上、人材育成）を図っていくことに期待します。

同時に、人材育成・研究の拠点のための施設設備が整備されればと思います。

私は門外漢ではありますが、「教育・研究」に関しては、根本的なところの「人事・人材育成システムの課題・壁」があるかと思っています。

「資料」に関しては、様々な分野の資料がいつでも手に取って見られるというのは、県立図書館の大きな魅力の一つだと思います。ベストセラーや趣味的なものも多少入れつつ、複数購入の数を減らし、国立国会図書館的に幅広い分野の収集を行い、個人利用者や県内図書館等からの様々な要請に対応していただけたらと思います。県内関連資料や貴重資料（保存の観点からも）は「電子化・公開」を促進し、遠隔での利用も可能にして「知の共有」を進めていただけたらと思います。

以上です。

<座長>

県内の大学図書館と公共図書館の連携が大切だというご意見でした。

<高峰由美委員>

テーマ：ビジネス支援と図書館の連携

私は宮崎の産業振興機構でコーディネーターをしております。自分自身とても本が好きで、個人的によく本を買っています。一方、私のいる産業新機構では様々なビジネスの相談を受けています。学生さん、スタートアップ、ベテランの方、一手に引き受けています。私自身は若手の方の相談を受けることが多いです。本部は佐土原にあるのですが、私はKITENビルのみやざきフードビジネス相談ステーションで相談を受けています。

産業振興機構がビジネス支援として、県立図書館との連携を初めて7、8年になるのではないのでしょうか。この館内でビジネス相談を受けています。私も連携が始まった当初、図書館で相談を受けておりました。東京で半年ほどインキュベーションマネージャーというスタートアップの方を養成する研修を受けたとき、最後の論文として「ビジネス支援図書館のあり方」みたいなものを書きました。図書館のビジネス支援サービスはアメリカ発

祥の考え方だと思いますが、今も産業振興機構では、週に1回と後は毎月第3日曜日ビジネス相談会を館内で行っています。

図書館に来られる方は佐土原の産業振興機構やKITENビルに見えた方と御相談の内容が結構異なります。図書館に相談に見える方はスタートアップ、どうしていいかわからない、何か現状を変えたくて、検討がされていない方がおみえになることが多いです。その答えを見つけようと思って、本をお読みになっていて、そのうち人と話してみようということでお見えになる方、今までビジネス相談をしたことが無いという方が非常に多いです。その場合、アイデアベースで、一緒に事業化について、何がその方にできるのか、市場性があるのかなど考えていきます。また、ビジネスの相談は結構、その方人生を左右する非常に大事なことなのですが、本人が何をしたいのか、自分でもよく分かっていない、言語化されていないため、そこを言語化していく壁打ちのような作業をしていくという事が多いです。

図書館の中で産業セミナーも開かせていただいた事もあります。

ビジネスの相談は人生の相談で、他人に言うのは恥ずかしいというのがありますので、非常にオープンで来やすいという点で、図書館はすごくいいと思います。また、知の集積施設として参考書籍も多い、レファレンス機能も充実しています。

一方、この県立図書館はビジネスの相談を受けるのにはいい場所であるのですが、課題もあります。これは、宮崎特有の課題かもしれませんが、あまりビジネスマンが積極的に図書館に来ているイメージが無いのです。地理的には結構ビジネス街から近い。でも心理的な距離感があります。私も最近あまりこちらに来ていません。この心理的距離感をうまくいい形で縮められたらもっといい連携ができるのになあ、と思います。

また、ビジネスのサポートというのは、本を読んですぐ実行できるわけではなくて、読んだ知識をどうやって自分の中で消化してアウトプットしていくか、自分のものとして落とし込んで実行していくかというのが大事なのですが、本を一人で読んでいるだけだとなかなかできない事であって、誰かと会話するなど、インキュベーション的にそれを孵化させていく必要があります。ビジネスと図書館の感じる距離感をどうやって近づけていくかというのは、多分間をつなぐ橋渡しをする「人」が一番大事なのだらうと思います。

誰がどうやって距離を縮めるか、一つの事例として、今、宮崎市内の中でもブックカフェや、行政主導ではない民間セミナーも増えています。ビジネスマンが集まる知見を広めるナレッジシェアの場が求められています。最近、私はポートランドに長く住んでいた友人に来てもらい、「ポートランドのまちづくりを学ぼう」というワークショップを企画しました。ビジネスマンはビジネス本ばかりを読んでいるわけではないのです。この日もビジネスマンが多く参加しましたが、アメリカや、ポートランド、環境についての本を読みたがって、こちらで準備した本を借りて帰っていました。

今度、哲学ワークショップもする予定です。

県立図書館も「Live!Library」という私が大好きなコンセプトがありますけれども、民間

側はコラボしたがつている事が非常に多いので、街に積極的に出て行く図書館、というのがあると距離が縮まるな、と思います。

<座長>

「図書館のビジネス支援」、「街へ積極的に出て行く図書館」についてお話しいただきました。

<山内研二委員>

テーマ：教育の場としての図書館と人材育成

教育の場としての図書館と人材育成ということについてお話しさせていただきます。これまで学生や県民の方の自主学習の場として利用があるかと思うのですが、これまで以上に必要になっていくのが、子ども達にどんな教育の場を提供していいのか、というのがあるかと思います。図書館には静かに利用しなければならないイメージがあるかと思いますが、これだけ蔵書がありますので、図書館の資料やレファレンスを活用しながら、ディスカッションして作業できる場、エリアがあってもいいのではないかと思いました。多様化、複雑化していく社会の中で子ども達に大人ができる教育として、自立的な発想を持ってほしい、ぶちあたった課題を自分で解決する自己解決能力を高めてほしいと思います。今、財務省、環境省、文科省が10年間ほど力を入れてきたESD（持続可能な開発のための教育）という教育方針があります。難しく聞こえますが、ふだんの生活や、学校教育の中で、いかに自分で考えて自分の事として取り組んでいくか、自分なりの答えを見つける教育方針です。そういった教育が図書館でもできると面白いだろうと思います。その場合、資料のアーカイブズやレファレンス機能を充実させると同時に人材育成も必要になっていくと思います。

館を運営していくという意味で人材育成のカリキュラムやプログラムをつくる、マネジメントをする方が重要になっていきますが、それにあわせて一方で、育てていく、バックヤードの、蔵書を収集する方、レファレンスをする方、専門職、いわばスペシャリストとしての人材も必要になっていきます。どちらの人材も3～10年かけて育てていく必要があるかと思います。そういった方達が、県立図書館の顔となっていったら、市町村図書館や大学図書館の担当者の方と顔の見える関係、頼るべき存在として長く勤めることができるのではないかと思います。そもそもの話だと思いますが、図書館で働く人は、すごく前のめりで、熱意を持っていて、本好きでなければダメではないかと思います。本に真摯に向き合って、本というものを皆に広げていきたい、という思いが必要だと思います。そういった方なら大学と連携していく中で、学生を巻き込みながら、新しい発想を持って図書館の研修やセミナーなどの新しい企画を生み、知を深めていく関係づくりができていくのではないかと思います。

<座長>

図書館は自立的に、自分で考える力をつける場であり、連携できる、関係性を持つことのできる拠点であってほしいというお話でした。

<川越祐子委員>

テーマ：郷土情報の収集と活用

郷土の雑誌の収集についてお話しさせていただきます。書籍と違って雑誌は収集しにくい情報です。私は個人的にフリーライターとして建築について書くことがあり、大学や県立図書館にレファレンスをお願いして雑誌の情報を取り寄せる事が多いのですが、雑誌で宮崎の情報が取り上げられたとき、県立図書館がもともと収集している雑誌であれば、そのまま保存したりするのでしょうが、デジタル化してとっておく方法や、収集していない雑誌であれば、専門的な情報だけでも、県の方や、周囲の県民の方にも情報を募って、せめて掲載されていたという情報だけでも蓄積するといいいのではないかと思います。雑誌は書籍とは違った観点で書かれたものも多く、大切な情報源です。

もう一つ、県や市町村の職員の方々と接する中で、職員の方々と図書館の距離を感じることがあります。観光の情報など、役場の担当の方に聞いても、ただ「分からない」と回答してくる事が多いです。私は県立図書館で調べることが多いのですが、県や市町村の職員の方も図書館で自分で調べたり、図書館に聞く、という事をすればいいのでは、とよく感じます。

<座長>

雑誌等、郷土の情報の収集が大切であると、また、自治体職員と図書館との距離を縮めていくことが重要ではないか、というお話がありました。

<山内利秋委員>

テーマ：デジタルアーカイブ拡大の必要性・県民リテラシー向上を目指したラーニングコモンズ設置の重要性

まず、デジタルアーカイブについてです。極めて残念ながら、他の県立クラスの館と比べ、宮崎県立図書館はデジタルアーカイブズ構築が必ずしも十分とは言えません。現状では独自性の強い資料が一部電子公開化されているのですが、残念ながら、活用頻度が高くなりにくい状況にあると思います。

例えば図書館 web 上では「デジタルアーカイブ」は古い HTML4.0 のままです。ユーザ・インターフェイスの側面から、現在では資料の持つ諸属性が利用者の活用に供しやすくなっていないといった課題があります。現状ではタブレットなどで見ることもできません。電子化に必要な予算が例年限られているのではないかと思います。貴重書や過去にマイクロ化されている資料がそのまま電子化されていないのではないかと思います。

また、文化財課が管轄している「みやざきデジタルミュージアム」には、図書館と同じく生涯学習課が所管する県立美術館資料も含まれていますが、図書館の資料は入っていません。最低でもここにリンクを張る程度の事は行わないと利用者としては不便であり、活用されにくいと思います。本当はここに文書センターも取り組んでいく事も可能ではないかと考えています。ユーザビリティの観点から再考していかないと運用費だけがかかってしまうという事になるのではないのでしょうか。

文化本舗の山内委員がおっしゃった事とかぶってきますが、県民のリテラシーを向上させていくために、高度に複雑化した社会を生きぬく力を獲得していくには、学齢期における学習活動だけでなく、生涯において学び続けていく力が今後とても重要だと思います。学校で受けてきた体系的なものだけではなく、色々な課題に対しどうやって解決していくか、という風に学びの形態が変化してきています。図書館は蓄積された「知」を色々な方法で多様に活用できる場だと思います。様々な情報を介してコミュニケーションが可能な空間を提供すべきではないかと思っています。

大学図書館ではラーニングコモンズという場がありますが、私はむしろ公共図書館こそ必要な場ではないかと思っています。県立図書館は第2線、後方支援的機能が重要視されるべきだと思いますが、一方で、現在の市町村の図書館でこういったものを独力でイチからはできない、むしろ、県立図書館が宮崎の実情にあった独自の学習形態モデルを作ってそれを基礎自治体にフィードバックさせていく役割があるのではないかと考えます。

<座長>

デジタルアーカイブの拡大、学びの形態が変化している中で宮崎独自の学習モデル、ラーニングコモンズのお話がありました。ラーニングコモンズ、私の大学にもありますが、自発性など、教育効果が高く、利用が増えてきた感触があります。

<中川美香委員>

テーマ：「市町村くまなく、県民の生きる力・考える力を育む図書館」及びその情報発信

県立図書館の経緯をふりかえますと、資料費削減問題をきっかけに、県立図書館の機能は何なのか、役割は何なのか、十分なスタッフはいるのか、市町村にサービスは行き届いているのか、次々に問題点が浮かび、その度に内外で真剣に議論し、その中で市町村の流通の問題など一つ一つ改善も見られるなど、わずか3年の間に、かつてないほどの県立図書館への関心の高まりがありました。

その延長で考えるときに、今この機を逃すべきではないと思います。それはこれまでにない関心の高まりというのも理由にあります。人口減少が進む中、市町村、県ともに財政の厳しさが増していく中、社会の担い手、人材の確保も難しくなっていく、だからこそ、今のうちに基盤をしっかりと、知の拠点として県民の暮らしを支えていく仕組みというものを作らねばならない、時代の転換期にいるんだということを、どれだけ意識できるか

ということが大切なのだと思います。

私は様々な分野の取材に行きますが、事前に基礎知識を取り入れようとしたとき、頼りになるのは県立図書館です。その度に、強く痛感するんですが、社会の様々な分野の事を横断的に捉えて、幅広くどんな課題に対しても扉を用意している、そんな施設は他にはないと思います。ぜひその特徴を強く認識すべきだと思います。

宮崎は農業、医療、環境、色々な課題があります。これから人口減少社会の中で、どれだけ一人一人が、心豊かに暮らしていけるか、価値観の転換を含めて、「知恵」というものがより試される時代が来るのだと思います。そういう未知の領域に踏み込もうとするときに、必要になるのが知識や知恵、情報、先人の教えなどです。県民の暮らしということを考えてときも、皆、親の介護や子どもの教育、借金、離婚、病気、孤独、様々な問題を抱えて生きています。

これからのビジョンですので、10年後、20年後、この核家族化、個人主義がどれだけ進むのか分かりませんが、少なくなっていく人口で、頼る人が周囲にいないという状況が増える事を考えたときに、今のうちに、「困ったら図書館へ」行くという流れ、道筋を作っておくことがすごく大切なのかと思います。

しかしこれが宮崎市偏重であったら困ります。市町村それぞれの図書館が、県立図書館の流通サービスとともに、市町村くまなく「頼れる図書館」になっておくということが大切だと思います。そのためには、地域の図書館を含めてそれぞれの図書館の意識を高めること、意識を共に高めていくための県立図書館のリーダーシップに期待しています。

キーワードは「人」です。先ほど言った県立図書館が唯一の場所、色々な分野に扉を開いている唯一の場所だと言いましたが、既にインターネットはそういうどんな世界にも通じる窓にはなっています。ただし、検索すれば、欲しい情報には出会いますが、検索の仕方によってその他の広がりが出てこない可能性があります。そこを補えるのが「人」でしょう。本だけではなく、人に出会えるのが図書館の魅力だと思います。レファレンスを受ける最中、何か困っているのだと察知したら、本だけでなく、あそこにこういう相談機関や人がいますよなどと、アドバイスできたりする、つまり、図書館というものは人々の生活と地続きにある、顔が見えるというのが魅力であり、特徴だということを認識しておくことがとても大切なのかと思います。そういう人材育成を進めるということが、選書でもレファレンス充実でも必要です。

人を育てるというのは、どれだけ意識を高められるかということで、最近気になっているキーワードがあります。自殺対策の勉強をしていた時に、「ゲートキーパー」という言葉を知りました。自殺のサインに気付いたときに、声をかけ、話を聞き、必要な支援につなげられる役割の人達のことで、「命の門番」と位置づけられ、国は養成しようとしています。ゲートキーパーとして、かかりつけのお医者さんや看護師さん、民生委員、ボランティアの人、色んな人達に意識を持ってほしいと言われていますが、図書館で働く人々もゲートキーパーというような意識を持つのはいかがでしょうか、ということをご提案したいと思い

ます。もちろん自殺防止というピンポイントの話ではなく、県民があらゆる分野で困ったり悩んだり、また、宮崎をこの先支えていく若者達が孤独に悩んだりすることのないように、色々な視点を持って、図書館がいかに県民の支えになれるか、市町村とともに意識していけるか、ということがすごく重要ではないかと思えます。大切なのは情熱ではないかと思えます。

<座長>

これから知恵が試される時代、県民のゲートキーパーとしての図書館の役割が期待されるのではないかと、というお話でした。

<巻庄次郎委員>

テーマ：今後県立図書館に求められる専門職像とその育成のための体制

はじめにお断りしておきたいのですが、今からいろいろとお話しますけれども、私も元県立図書館におりました。決して現在の県立図書館の職員の方々がお仕事をしていないとは思っていません。それぞれの立場で頑張られていることは間違いありません。そのところは誤解のないようお願いいたします。

他の委員の方のお話を伺いながら、最終的には「人」かな、と思っております。結論から申し上げますと、県立図書館が、その使命感を持って、県民や市町村立図書館等の期待に応え、その信頼を得て、十分な役割を果たしていくためには、専門職つまり司書制度の復活が急務だと確信しております。県立図書館を本気でよくしたいなら、これしかないと考えます。もちろん司書だけでなく、県立図書館には、学芸員、社会教育主事、行政職員という多職種の人がバランスよく配置された組織体制が必要ですが、その中心が司書だと思います。

私が考えます図書館経営でとても大切なことは2つあります。その一つは、図書館サービスのノウハウの蓄積と継続的な進化ができること。もう一つは、専門職を配置するだけでなく、その人達を育てていく仕組みがあることです。

一つめの、図書館サービスのノウハウの蓄積と継続的な進化についてですが、図書館は直接・間接のサービスを行っていくことで、そのノウハウを蓄積していきます。利用者は本の貸出しなどの直接サービスしか見えませんが、資料の収集やパスファインダーの作成などのバックヤードの間接サービスが、直接サービスを支えています。しかしそのバックヤードの部分もなかなか積み上がっていかないのが現状ではないかと思えます。そしてその蓄積されたノウハウをベースにして、更に、その上に立ったサービスへと進化させることのできる図書館であることが最も大切と考えます。それでは現在の県立図書館がそのような進化できる体制となっているのかであります。

生涯学習課をとおして県立図書館から、三つのデータを頂きました。ご対応いただきありがとうございました。

一つは県立図書館から過去3年に異動した職員の平均勤務年数なんですが、これが3.4年。また、過去10年（現職を除く、うち2年は派遣職員なし）で県立図書館に異動してきて、司書の資格を出張で取得した職員6名の平均勤務年数ですが、これが3.7年。資格取得後の平均勤務年数は3年です。司書の資格を取得するのに出張が約2か月、費用は受講料と旅費で約50万円です。これに補充職員をもし入れたとすればそれ以上のお金がかかります。司書を一人育成するのに50万円以上かかります。県民の大切な税金50万円以上を費やして、司書の資格を取得させ、その後約3年しか勤務していない。このことを県民は、妥当と考えるか、もったいないと考えるか、どうなのでしょう。

ここで、皆さんに一番、考えていただきたいのは、それでは司書の資格を取得すれば司書なのかということです。司書資格をとって3年しかいない。司書の仕事は直接サービス、バックヤードの仕事、多岐にわたります。県立図書館は市町村支援も仕事にあります。司書の資格をとるとというのは、スタートでしかありません。

私も司書資格は県立図書館時代に、大学の通信教育で取得し10年近くなりますが、今まで自分を司書と思ったことは一度もありません。司書は長い年月をかけ、現場での経験、研修、そして自己研鑽を通して必要な知識やスキルを身に付け、人的ネットワークも広げながら、長い年月をかけて真の司書として育っていくものと考えます。県立図書館への期待に応じていくには、顔が見える、あの人に聞いてみよう、あの人に相談してみようという流れがなければ厳しいのではないかと。そのためには、3、4年で職員が変わると難しいと思います。人を育てる仕組みがあわせて必要だと思います。

<座長>

専門職司書制度の復活、人を育てる仕組みというのが必要というお話でした。

<宮田香子委員>

テーマ：県立図書館の児童サービスの確立

私は、宮崎県子ども読書活動推進計画の策定にも関わったのですが、そのときに、感じたのは、委員の方々の中でも、児童サービスの意義などについて共通理解がなかなかで、皆さん、自分の育ってきた中での、個人的な本との関わりに基づいてしか発言ができなくて、その狭い認識の中で一つの施策をつくりあげるに終わってしまうということがあったわけです。

つい最近も図書館員の方達に児童サービスの話をしてほしいと言われて出かけていきながら、この話を私がしているのか、と。私もボランティアとして10年、木城えほんの郷でブックアドバイザーをし、司書の資格を持っているとはいえ、こういう仕事は本来ならば県立図書館がするのが一番いいと思います。

児童サービスというのは、乳幼児など、一番最初に図書館というものを意識して活用する入り口にいる人達に、それから先も利用者として育てていく、一番大事なところだと思

うのです。

これからの県立図書館にも、児童サービスをもっと大事にしてほしい。県立図書館の中に児童サービスについて専門的に考える人、部署が無いというのは困ります。これまで、おはなし会の事など、県立図書館に相談したこともあったのですが、的確に答えてもらった事がなかなかありませんでした。図書館では教えてもらえないものだから、ボランティアも自分達で県外の研修に行ったりして、部分的には普通の図書館員より詳しくなっています。でも、子どもの読書活動を推進する上で、図書館は拠点ですし、色々な機関や組織を結びつけて、支援する要の機関が県立図書館だと考えます。要の機関に専門性とコーディネート力を持った人、組織というのが無いと、今後もっと大変になると思います。

今ボランティアのほうが知識があるものだから、図書館員はびびっている状況です。私はボランティアの人達には、図書館の人も一生懸命ですから、一緒に協働していきましょうと言わなければいけないし、図書館の人にはボランティアの人は色々知っているので、上手に聞きながら、一緒に勉強していきましょうと言わなくてはならない。

これから県全体の児童サービスを構築することが、それから先につながっていきます。図書館サービスは需要が供給を生むのではなく、供給されたことがないと分からないんです。私も小学校に司書がいる鹿児島で育ったので、司書がいて当たり前と思っていたら、宮崎に来て、自分の子どもの学校に司書がいなくて、それで学校図書館なのかとショックを受けました。自分が受けたことのないサービスは想像ができないものですから、学校図書館は小学校3年にならないと使えなくても、私のように、県外の司書がいる小学校で育った人達意外、おかしいと思わないわけです。

やはり県立図書館に児童サービスの担当部署を継続性を持っておき、児童サービスを供給する体制を整えていってほしいと思います。

それから、図書館に民間委託はなじまないとお話ししておきたいと思います。官製ワーキングプワーを生み出している状況というのを色々なところで聞きますし、若い人達が図書館で情熱を持って働き続けるために、人材育成のためにも直営で行うべきだと考えています。

<座長>

図書館の児童サービスの専門人材の必要性と体制についてお話がありました。

<根岸裕孝委員>

テーマ：図書館と政策づくり

地方分権、自己決定、自己責任という流れの中、それにふさわしい政策形成力があるかどうかです。私自身年間20くらい委員会の座長や委員をしまして、色々な分野に関わっているのですが、どうも政策形成に、必要な情報収集ができてないでやっているな、と感じるときがあります。詰めが甘いんじゃないか、と、もうちょっと考えたほうがいい

んじゃないかと。発表した後で穴が見つかって、途中でひっくり返ったり、議会で持たないとか、いくつも経験しました。その度に感じたのは、きちんと集めるべき情報を集めて検討していないんだな、ということです。色々聞くと、国に問い合わせれば色々な情報が出てくるとか、自治体、類似団体に照会かければ分かったと、それにあわせればいける、とかいうやり方に慣れている。

一步踏み出すときは何が問題なのか、をしっかりと押さえていかないと本当はいけない。例えば県土整備部が美しい宮崎をつくる条例をつくらうとしています。条例をつくるだけでなく、それを進めるための景観保全のための資金が必要と、一般財源が無理だったら税金をとるとか考える、そのためにはどういう問題があるか、とか何をクリアしなくてはいけないわけですが、職員は、とことん情報を収集し、考え、検討しながら政策形成するという事をやったことがない。職員がきちんとした政策を作れるかどうかは非常に重要だと思いますが、職員は新しいことにチャレンジするということが苦手で、行政特有の、そんなことしなくても何とかなるよという雰囲気があって、それが格差につながっていくんじゃないかと感じています。職員の力量の向上のために、図書館をどう具体的に伝えていくか、経験を積み重ねていくべきだろうと思います。

また、地方議会の活性化と図書館について、お話します。議会の議論を見ていますと、議会で、議員はここは突っ込み処なのに、なぜ突っ込まないのだろう、質問しないのだろう、という事があります。議員さんに聞くと自分には情報が無いという。でも図書館を使えばかなりの事が質問できるのに、図書館を活用したことがないんじゃないかと思えます。

国会議員の方で30冊読めばだいたいその分野の最先端が理解できるという人がいます。私もだいたい専門外に関わる場合その分野の本を10冊くらい読むとその分野がだいたい見えてくるという経験があります。

議員の質問づくりを県立図書館が支援してはどうかと思います。ここは色々な政策づくりについて経験知をあげないと多分応援はできない。議員さんがどういう事に関心があって、どういう資料を揃えればいいのか、どういう質問をしたらいいのか、執行部はこれくらいの情報量とか、ここに問題点があるとか、相当な議論をかみ合わせることができる。図書館の情報量で十分できると思います。

図書館が知の砦として、図書館を拠点に、新しいものを作っていける、色々な問題を解決していけると思えます。まちづくり地域づくりという、知のネットワークとして、社会教育だとか、教育委員会の地域づくりとかは、どこか視野が狭いというか、色々なつながりが弱いのかなあと正直思えます。地域づくりというと本当は公民館や図書館なんです。公民館が利用しづらいと良く聞きます。いかに住民が拠点としてまちづくりしていくかという話ではなく、部屋の管理の番人みたいな人がいて、いかに利用規則を守らせるか、掃除をちゃんとしろとかそういう話が先行していると。

図書館も貸本屋を脱するために、新しいことを作っていく、自ら変わっていこうとしなかったら、どんどん小さくなっていくだけです。

今、自分達の公民館をつくろうという動きが出てきていて、そこまで社会教育の領域が時代に合っていないのではないかと思います。時代の変化に対応し、自ら変わっていく姿勢を示さないと、県民や市民から見放されるていくだけではないでしょうか。ぜひとも資源を活かしてほしいと思います。

図書館が変われば地域が変わる、人は変わります。図書館が変わることによって、色々な人は元気をもらい、新しいことにチャレンジできます。官による貸本屋的な発想をやめて、イノベーション、新しいことをつくっていく、人がつながる場なのだという観点から、どう県立図書館を活かしていくかということを考えないといけないのではないかと考えるところです。

～休憩～

<座長>

皆さんのご発表を聞くと「人材をどう確保・育成していくか」「場所・空間をどう生かしていくか」「ネットワーク、どういう人とつながっていくか」についてのお話だったかと。まず人材の事について、他にいかがでしょうか。

<巻庄次郎委員>

図書館に異動してきたとき受けた引き継ぎについてお話します。引き継いだ仕事が全てではありません。見えない、分からない仕事がありますが、そこはある程度、館内の、色々な部署を経験することでしか見えてきません。特に県立図書館は縦割りになっています。市町村図書館であれば皆で資料の受入などもしますが、県立図書館は縦割で一つの部署だけを3年したくらいでは全体が見えないのです。

専門職を入れて色々な経験をさせながら、人事交流も行い、広い世界も見せて育てていくということが必要かと思います。

私は図書館に異動してきたとき、引き継ぎはわずか3時間でした。この時間で引き継げるのは、係の仕事の概要、自分の仕事と係の課題、そして当面4月、5月にすべき急ぎの仕事くらいです。もちろん異動後勉強していかないといけないのですが、図書館の仕事は、ファイルを2～3冊受け取って終わり、これではなかなか深まっていきません。しかも勤務がわずか3年では、自分が引き継いだ範囲くらいでしか、次の人に引き継ぐことができず、それではどんどん抜けていく危険があります。周囲も同じく3年で異動しているわけですから、周囲の誰も抜けていることが分からないので、指摘もできない、そういう危うい部分があります。

<座長>

専門職を採用することが前提で、継承されることが大事では無いかと。

<中川美香委員>

私も具体的に、そこを変えていくことで図書館が変わるのかなと思いました。

人が育っていき、いいサービスをすることで、そのサービスを受けた人により口コミで図書館のサービスが広がっていきます。いいサービスをする図書館ができると、そこに自ずと人が集まります。

東京子ども図書館という松岡享子さんが名誉理事長の私立図書館があります。宮崎では図書館ではありませんが、木城えほんの郷があり、人が長く働き続けて、自分達で勉強会を開いたり、専門知識を身につけたり、多くのボランティアも関わっていますが、色々な全国の人達が集まり頼って来ますので、外部の方たちとも課題を共有しながら、何が大切かなど、常に前進しています。

東京子ども図書館や木城えほんの郷のようなところの事を考えたときに、県内の図書館の色々なレベルをあげていくには、県立図書館はそういった存在、情熱的なスタッフがいて、ここに来たら自分達が抱えている課題を解決するヒントが見つかるとか、講師を紹介してもらえとか、そういったつながりがある場になってほしいと思います。継続的に仕事していける場であることが大切です。

皮肉なことですが、資金繰りが難しいのに民間の東京子ども図書館がなぜ作られ、今も続けているかという、全国の公共図書館で児童サービスの司書の異動サイクルが早くて専門知識やノウハウのストックができず、人が育ちにくい、どこか一つくらいは情熱も含め知識とノウハウのストックができる図書館が必要と考えてのことだそうです。

県立図書館もそういう場になれば、自ずと人が集まってくると思います。

<座長>

なぜ3年で動くのが当たり前になっているのだろうか、もう少し融通きかせて5、6年にできないのでしょうか。司書採用を辞めたのは、図書館に専門性はいらぬという判断のもとに進めてきたのかな、と思いますが、せつかくビジョンをつくるなら、そこは変えて欲しいなと思いました。

<山内研二委員>

人が育っていくシステムですね。先輩司書、伴走をしていく人は今いるのでしょうか。そういうシステムがちゃんとつくることが大事かと思います。

<糸賀雅児アドバイザー>

「司書」という資格と、図書館で専門的な仕事をして経験をつみ、司書らしい独創性と判断力を身につけることは別です。「司書資格を取得すれば司書なのか」、と巻委員が問題

提起されました。いわばペーパードライバーのように、運転免許を持っている人が、ベテランドライバーと同じといえるかどうか。車の運転免許に一種と二種とあるように、人を載せてきちんと責任をもって運転できる人は二種免許です。建築も教員も医師、看護師の世界も、別になっています。公共図書館についても「認定司書」という制度をつくったのですが、2ヶ月講習にいかせて資格をとらせ、その人達が、ある一定の人数いて、2年、3年仕事をすれば、司書が仕事をしたのだからそれでもういいと、異動させ、また次の人に資格をとらせる。これでは、司書の専門職集団は育たない、そうすると、宮崎県に必要なのは司書としての人材育成計画でしょう。中長期のビジョンをもって、どうやって人を育てていくか、例えば、メンター的な役割を果たす人がいて、新人の司書に対して今後あなたにはこういう仕事、役割がある、そのときどういう判断をすればいいのか、物事を考えていけばいいのかという事について、業務以外の場で学ぶ機会をつくっていく事も必要です。

そういう意味では、教育委員会では、指導主事がいて、先生達に教え方などについて色々アドバイスしていきますが、図書館にも「図書館主事」みたいな人が必要だろうと思います。図書館で実際に司書の仕事をしていく中で、広い視野にたてる経験だとか、それなりの性格、キャラクターも必要だと思います。本が好きだといいという話がありましたけれど、それ以上に図書館の司書は人々の暮らしとか、人そのものに関心がないとダメだと思います。本が好きなのは必要最低限の条件ですが、人間だとか地域の暮らしに関心を持つ、そういうことができる人が、やっぱりある程度経験を積んだ図書館主事みたいな人が県教育委員会にいて、県内の図書館に対してもアドバイスをしていくわけです。実務経験とともにある程度行政的な知識もある、県全体を見渡せるような立場の人が本当は県の教育委員会に一人か二人いて、県立図書館の相談相手にもなるし、県内の市町村全体の貢献を考えて、アドバイスし、政策をつくっていく、そういったことを宮崎県でやっていただけると、全国に波及すると思います。

今、社会教育主事の発令は全国的に減っています。公民館そのものが一方でかなり利用者が減っており、年齢層が高くて利用者が固定化しています。それに比べると図書館は、はるかに利用する年齢層の幅が広く、利用者も多いです。社会教育主事の発令を図書館主事に振り替えることができると思います。

宮崎県で導入すると全国で注目され、視察が増え、ますますしっかりした仕事をしなくてはいけないな、と充実していくきっかけにはなると思います。

今、認定司書の資格を宮崎県内で何名かの司書がとっていますが、県内の図書館の合意形成をして、長期的な人材育成をはかってほしい。司書資格者を増やすのではなく、認定司書を増やすような目標を持っていただきたいものです。

また、既にいくつかの県では、他の図書館で経験を積んだ人を中途採用することをしていきます。神奈川県立図書館は、司書の専門職採用のある県ですが、団塊世代が退職した後、ぽっかり穴が空いていた司書枠に、40代の他で経験してきた司書を採用しています。新

しく司書資格をとった人を数年図書館においておだけというのは、本来の図書館のあり方、司書のあり方ではないです。

<座長>

県に長期の司書養成計画が必要と。図書館主事のような役職をつくるというお話、なるほどと思いました。

それでは、場所、空間というお話も出ました。もっと図書館が「街」に出ていくことが必要なのではないか、またラーニングコモンズが必要なのではというお話がありました。

<山内利秋委員>

公共施設など、どうしても一つインフラつくってしまうと、箱を固定的に考えてしまいます。宮崎に模範となるものとして、みやざきアートセンターがあるのではないかと思います。銀行をリノベーションして、博物館でも図書館でも児童センターでも文化センターでもないその全ての中間的なところを担っている面白い場所です。宮崎の旧城ヶ崎地区の民家を解体し、色々な資料を救済するという活動をしました。ふすまを解体すると、古文書が出てくるといことがよくありますが、先週アートセンターでその救済したふすまの解体ワークショップを行いました。そうすると、何をやっているんだらうと、デイサービスのお年寄りの方も覗いてくるわけです。説明して、お誘いすると参加していただきました。こういった予期しないコミュニケーションが可能となった背景が生じたのはセンターの空間構成が非常にうまくできているためだな、と思いました。ワークショップをやっている人もそれが励みになって、また新しい学びの場になっていくのを感じました。

<山内研二委員>

ありがとうございます。アートセンターとしては、元々あの部屋は作業をする場という前提でした。しかしガラス張りになっていることで、面白い、別の効果が生まれているようです。あの部屋について、また色々なご意見、ご要望を受けているんですけど、逆に市民の方に色々な使い方を言っただけなのが非常にありがたいです。こういうルールですよ、と限定するのではなく、指定管理者として、市と相談としながら新たな活用を見いだしているところです。

<座長>

空間という点で他にいかがでしょうか。

<高峰由美委員>

私達が図書館を大好きなところって、ハコとか本だけではなく、そこにあるナレッジだと思えます。今ビジネスでも皆さん新しく起業される方、ソーシャルビジネス、社会企業

系が多いんですが、ひとつのキーワードとしてナレッジシェアをしていくというのがあります。知識とか経験をないほうからあるほうへシェアすることで、「いいとこどり」で次のいい時代をつくろうという気風があります。

多分図書館もそういうナレッジをシェアしていくという形で皆さんがコンセプトを考えると、ハコにこだわらない色んなところに出て行くとか、ここでセミナーをするとか、もう一つ大きな枠ができる、枠が大きく広がるのではないかと思います。

例えば今、私は宮崎と台湾の交流事業をしているのですが、ビジネスだけの観点ですと、意識が萎縮してしまいがちですが、お互いのいいところ悪いところありますので、ビジネス以外にも、お互いの知識と経験をシェアしようということになると、自由な動きが出てきます。このように、今の枠を外してナレッジをシェアしていくと、これから職員さんも動きやすくなるのではないかと感じた次第です。

本を外に持って行くのも、人を呼んで話してもらうのもナレッジシェアですし、先ほどの議員さんの質問のことも、ナレッジシェアの一つです。知恵、知識に関する色んなことを交換するというのは図書館の大きなコンセプトになるのではと思います。

<座長>

ナレッジシェアですね。色々な情報交換ができる図書館。

本の管理のようなイメージが強くて。ナレッジシェアのような色々な情報、色々な人に出会う場がいいですね。私のところの学生も大学図書館にラーニングコモンズできてから、グループでディスカッションしたり、ホワイトボードを持ってきて書いて話し合ったりとか、雰囲気が変わってきています。県立図書館のある空間をラーニングコモンズに切り替えていくとかできるのではないかと思いますね。

<糸賀アドバイザー>

県立図書館のビジョンとしては、今のラーニングコモンズ、ビジネス支援、児童サービスとかいうように、県立図書館がやると他の市町村の図書館にとってモデルとなって、自分の市町村でも身の丈にあったやり方で、ビジネス支援をやるとか、ラーニングコモンズのような公共空間を考えるというふうになっていく、一つのモデルを県立図書館がつくっていく。その仕事自体は県立図書館だけとか、県立図書館でなければできないということではないと思います。ただ、市町村にとってはそれがどういうものなのか、自分の図書館でできるものか分からないので、先導的役割として、まずは県立図書館がやる、県立図書館がやるならば、そういう位置づけになると思います。これは、県立図書館がやりさえすれば、後は市町村は、県立図書館に任せっきりというのでありません。

そういうサービスのモデル的な役割と同時に、県立図書館の役割は県内図書館全体の振興です。宮崎市から遠いところも県内ありますから、そういうところの図書館振興も県立図書館では考えていく必要があります。今の状況ですと県立図書館に経験を積んだ司書が

いないのだから、市町村はもっといらないのだろうと思われてしまいます。県内図書館全体の振興を考えれば、司書をどうやって育てるか、県立に15人専門の司書がいるのであれば、市町村は5人いるかもしれない、と考えてもらうようなモデル的なことをやると同時に、県内図書館全体の底上げにつながるような事をやっていかないと県立図書館のモデルとしては成り立たないと思います。

それから、先ほど高峰さんがおっしゃったことで言うと、司書はイベント屋的になっていきます。社会教育主事は基本的に事務局にはいなくて、週末はあっちのイベント、こちらの運動会と、常に外をかけまわっているのですが、そういう発想でこれまで司書の教育は行われていないのです。そういうイベント的な事を企画したり、ラーニングコモンズを設置したりすると、利用者間の双方向コミュニケーションがもっとやりやすくなるのではないか、というような企画や提案は、従来の司書ではなかなか発想しにくいですね。大学の24単位という限られた単位の中で、今皆さんが期待するような司書を育成するのは難しい。

すると出発点のところは司書として、まず基本的な図書館の知識を身につけ、そこから先、経験を積み重ねながら広い視野にたって、ラーニングコモンズやビジネス支援、児童サービスでの学校との連携などを行う。そういう発想や広い視野に立つには、中長期的な人材育成がそこでも必要になっていきます。

<座長>

ありがとうございました。モデルとして図書館の底上げ、司書を育てることが大切だというお話でした。

では、ネットワークについてはどうでしょう。司書が色々なところにつながりをつくっていく、図書館が連携していくということについてはいかがでしょう。

<川越祐子委員>

先ほども言いましたが、県、市町村のまずは職員からだと思います。最初の研修であるのかもしれませんが、図書館がこういう風に活用できるんだとか、それにまつわる地域の人で、こういう事については、こういう人材がいらっしゃる、という事を共有して、各地色々な方からの質問や尋ねたいことに、職員が色々な形で答えられるという環境がつくっていけるといいのではと思います。

例えば県立図書館でそういう事ができ、それが、県内の図書館に波及していくという風になっていくと、県全体が活性化していくのではないのでしょうか。仕事で観光情報の発信に携わっているのですが、例えばとても古い文献を見ていくと、宮崎では昔こういう事が注目されていた時代があるのだな、と発見すると、それを発信してみようとか、昔のものに光をあてることもできると感じます。今、色々な発信が可能な時代です。そういった面からも図書館を活用していくことに目を向けていけばいいのかと思います。

<座長>

地域資源、こんな風な見方があったのか、など忘れられたものをもう一回生かしていく面で図書館の情報や資料が生きていくという事ですね。

<巻庄次郎委員>

ネットワークの関係です。先ほど業務の継続性ということをお話しましたが、今も県立図書館では下のロビーで、県政の情報発信事業をしています。昔、あの事業を始めたときには、県政の重点施策を県民の方々に知らせると同時に、県の行政職員が県立図書館の事を知らないということで、彼らとのネットワークづくり、そして行政資料収集というのが目的にありました。図書館には行政支援として、行政の政策形成支援と広報支援の二つを行っていくという考えがありました。そこで、当時は政策形成支援を行うためにも、行政の人を知るために、情報発信事業を行う際、資料収集、普及支援、情報提供の担当など横断的なチームを館内に組んで、巻き込むことで、県庁とネットワークをつくり、より行政支援の充実を図っていこうという考えがありました。今は、手段が目的化している事もあるのではと思います。

<山内研二委員>

職員が3年で異動してしまう、というのがありましたが、それだけ異動が多いのであれば、横のつながりができるんじゃないかと思いますが。今、西都原考古博物館で隼人と蝦夷という展示をしています。もっと広く図書館とも連携ができるのではないかと思います。人材も図書館側と博物館側は異動はしていますが、個人レベルでのつながりで、もったいないと思います。組織としての横の連携、「横割」ができないかと外から見ていて思います。

<宮田香子委員>

子どもと読書の関係で言えば、県内、各市町村にも、子どもと読書についての色々な団体があるわけです。その団体にネットワークづくり、横のつながりがない。それを図書館が声をかけてくださって集まって顔をあわせるということは過去にありました。そういう集まりを持ったときに、交流の場をつくってくださるのはありがたいのですが、図書館がどういう事ができるというのをもっと話してほしかったと思います。

例えば、マイラインのサービスの事を具体的に話して下さるとか。子どもの読書についての活動を熱心に行っている方も、案外図書館の事はよく知りません。地元の図書館を利用していない、活用していない方も多くて、残念に思います。

以前県立図書館では県内市内の読書グループを全部把握していたと思うのですが、今学校の代表者はどんどん変わるために名簿づくりはしていないのかもしれない。ネットワ

ークづくりとともに、そこへの図書館の情報発信が必要だと思います。

<座長>

図書館を利用すると、こんなに宮崎良くなるんだと自信を持って言ってくれる人、実感持ってくれる人が増えるといいですね。

<中川美香委員>

県内の図書館とともに成長するという観点で、宮崎市内のネットワークだけではなく、各市町村にある図書館、そのまわりの住民、ボランティア団体、色々な方達とのネットワークを作っていくことが大事だと思います。モデル的なイベントを仕掛けていくのも一つの考え方ですが、アウトリーチをもっと進めていってほしいと思います。

県立図書館で行っている読書フォーラムを日南や延岡で、地域の団体と読書に関わる人達と実行委員会形式で行うだとか、わくわくするイベントをアウトリーチでやっていく、その中で、各地域に人達とのネットワークができていく、皆で交わって楽しく好奇心を満たしながら、力を高めていくという仕掛けができるといいのではないかと思います。

また、高峰委員のおっしゃられたビジネスマンが少ない、というお話がありましたが、前回配られた資料を見ると「第二のオフィス」として図書館を打ち出しているという例がありまして、自分の会社とかお店にはそこまでの蔵書はないけれど、図書館で色々調べたり、またそこで出会う人とのネットワークができていくということもあるのかと思いました。

<山内研二委員>

生徒や学生が県立図書館を活用するときに、先生の存在が大きいと思いますが、先生達が県立図書館の方とつながるきっかけの研修会や講習会があればいいなと思いました。図書館がこんなに使えるんだということや、専門の方がいるということを先生達に改めて認識していただいて、それを子ども達に伝えてほしいと強く思います。そういうネットワークをつくるといいのではないのでしょうか。

<座長>

学校の先生と図書館のつながりですね。教育委員会の中だからできそうですが。総合的な学習としてどう支援していくかという中で、学校図書館の機能が今弱いとすれば、県立図書館の役割があるでしょう。大学の入試制度が変わるので図書館の役割は今後相当大きくなるのではないのでしょうか。高校生達に自分で調べる場の提供、本の提供をやるかやらないかが、入試結果にも関わってくるんじゃないかと思います。この時代の変化に応じた高校支援について、図書館の役割は大きいのではないかと思います。

<山内利秋委員>

委員が集まってこれだけ話が出ましたので、「ぜひ、受け止めていきたい」という一言で終わらせないで、こうした意見が具体的に適う形というものを明確に考えていただきたいと要望いたしたいと思います。

<川越祐子委員>

宮崎県の建築士会で行っているヘリテージマネージャー養成講習会という文化財関係の講習に関わっています。宮崎県全体の成り立ちについてなど話していただくときにこの図書館を共催という形で使わせていただきました。でも、担当からは、図書館を利用するための条件が色々あり、大変だったと聞きました。利用できると決まると、関連本などを紹介していただいたりと非常に協力的だったのですが、共催という形以外にももう少し利用しやすい方法があるといいと思いました。

<中川美香委員>

今を見るというよりも、ビジョンの懇談会なので、先を見るという方向でビジョンはまとめていく必要があるなと思います。今を見るとどうしても言い訳になります。私自身も含めて、今の人事システムはこうできないとか、予算が無いからとか。だからこそ未来を考えて提言するというのが、この会議の一番大切なポイントだと思います。今はいない未来の人達のことを考えてつくっていくことが大切です。持続可能性、未来につなげていくという視点で、提言がビジョンに生きていくといいと思います。

<宮田香子委員>

高校に今司書有資格者がいないという現状は変えないといけないのではと思います。宮崎の大きな損失だと思います。図書館に来る子ども達だけでなく、今来ていない子ども達のために何ができるか、ということ、先生方に図書館を分かってもらうためのアウトリーチをしなくてはいけないと思います。また、図書館担当ではない先生達に、学校に出向いて行って図書館の事について話をする場所や時間をつくるといいと思います。

<糸賀雅児アドバイザー>

図書館政策の担当の職員が県の教育委員会の中にいることが必要だと思います。行政職ではなく、図書館の経験のあり、よく分かっている人が必要でしょう。

今あちこちの自治体に学校図書館スーパーバイザーというのが、置かれるようになっていきます。有名なのは藤田佳江さんという東京の荒川区で司書教諭をしていた方です。神奈川県の大和市に引っばられて、スーパーバイザーをすることで、大和市の学校図書館が見違えていきました。子ども達がわずか10分、15分の休み時間を利用して図書館に駆け込んできていました。何校か掛け持ちで巡回して、そこにいる学校司書を色々指導して

いるわけです。校長先生も驚いていました。この方はその後、読書科という教科がある、江戸川区に移られました。そういう経験がある人がアドバイザーとしていれば、変わっていきます。宮崎県でも各学校に配置する前に、良く知った人が何校か掛け持ちで現場の学校司書に色々アドバイスをしていくのがいいと思いました。

川越さんが言われた郷土情報というか、地域情報についてはそれぞれの自治体がきちんと集めていかななくてはいけません。納本条例、NPOだとか公益法人が出したニューズレターや会報、活動記録は地元の図書館に納本しましょうというのを条例化すると、図書館という存在を意識するようになりますし、議員さんもこの記録も地元の図書館に納本しようということになります。自治体単位で納本条例を定めて地域の人がつくったもの、学校の卒業記念文集とか、地元が集めないと50年100年経ったときに各家庭のは散逸するので、保存するといいいでしょう。

また、小橋委員がおっしゃっていた事から、この県には「図書館大会」は無いのかな、と思いました。図書館大会があれば、公共図書館、学校図書館、大学図書館、専門図書館の人も入って議論できるわけです。県の図書館大会を開催し、分科会を設けて、例えばラーニングコモンズやビジネス支援をテーマにするとか、色々な図書館の方が共通テーマで議論することで横のネットワークができていきます。県として図書館大会を開催すべきだと思います。宮崎市内だけでなく、延岡市で開催してもいいですし、それが県内全体の図書館振興につながっていくと思いました。

<座長>

図書館が変われば地域が変わるといようなビジョンをつくっていただきたいと思いません。

<事務局>

懇談会の今後について、御説明いたします。

この懇談会は9月26日の第3回を最後としますが、本日の第2回までのご意見をもとに提言の素案、骨子について、座長の根岸先生のご意見を伺いまとめさせていただきます。それを第3回の1、2週間前までに事務局から皆様にメールか郵送の形でお送りし、事前にご確認いただきます。第3回当日は主にその素案に足りないところ、加えるべきところ、おかしいと感じるところなどについて、皆様にご意見をいただくこととなる予定です。

第3回後、最終的には座長の根岸先生に一任するという事でよろしいでしょうか。

<委員> 分かりました。

<事務局>

では、根岸先生、よろしく願いいたします。

<座長>

分かりました。それではこれで第 2 回の協議を終了します。皆様ありがとうございました。